

早稲田大学高等学院研究年誌第六一号 抜刷
二〇一七年三月発行

『伊勢物語』ノート

——第六段・芥河章段を〈語り〉から考える——

松島毅

『伊勢物語』ノート

—第六段・芥河章段を（語り）から考える—

松 島 毅

はじめに

これまでに担当してきた高校の授業や大学の講義・演習において『伊勢物語』をしばしば題材としてとりあげてきた。授業に際しては先学の諸成果を勉強させていただきながら任をふさいできたわけだが、一方でそうした成果を参考にさせていただいた上でなお、自分なりの疑問がわいたり、はたしてこの説明の仕方でのいかと迷うことがあった。そうした疑問につき、自分なりに考えてみたいと思うようになったのが本稿のきっかけである。取り組んでみた問題はいくつもあるが、その中で、本稿においては特に第六段を中心に据えたい。いうまでもなく、第六段は（芥河）の段として知られ、在原業平と二条の後藤原高子との恋愛や〈所謂後人注〉の問題などをめぐり、枚挙にいとまない議論が繰り広げられている章段である。本稿でも当然、こうした問題点にも考察を及ぼしていくこととなるが、最終的にはそれらを語りの構造という観点からとらえ、読解・考察を試みようと思う。

まずは、章段を概観しよう。本文を掲出する。引用は、新編日本古典文学全集（小学館）によった。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに來けり。芥河といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籥を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを

これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

この章段前半の概要は、次のようなものになろう。

男が女に長年にわたって求婚し続けたがかなわず、思い余つて盗み出す。目指す先は遠いが夜の雷雨という悪条件に見舞われ、男は、荒れ果てた倉に女を押し込めて、自ら倉の入り口を守り一夜をしのごうとするが、実は、その倉

には鬼が住んでおり、女は一口で食われてしまう。夜が明けて、男は再び逃避行を続けようとするが、女の姿はどこにもなく、男はそれを地団太を踏んで悲しむ。

これに続く後半部では、この前半部の出来事が語りなおされる。女は実は入内前の「二条の后」すなわち藤原高子であり、一方的に思いを抱いた男が無理やり盗み出して逃げようとしたのを、女の兄たち―藤原国経・基経兄弟―に見とがめられて取り返されたと説明されるのである。盗み出した女が鬼に食われることによつて永遠に失われるという悲劇の怪異譚は、男の、片思いゆえの誘拐という暴挙が未遂に終わったことと明かされて語りおさめられる。

この前半部と後半部の関係については、特に後半部について後人の付加したものと考える向きも多く、そこから〈所謂後人注〉との呼び名も与えられ、それが物語の正文であるか否かをめぐつて膨大な議論がなされてきた。今、この議論の詳細な整理に踏み込むことは避けるが、前半部と後半部〈所謂後人注〉がどのような食い違いを見せているのかにはやはり触れておかなければならない。この食い違いとても多岐にわたり、着目点によつては容易に項目を並べて対照することのできる性質のものではないが、ここでは、前半部と〈所謂後人注〉部分によつて、男と女（あるいは二条の后）の恋のありよう自体が大きく異なるものとして提示されていることを確認しておきたい。

① 男が女を盗み出す経緯

前半部では「年を経てよばひわたりける」とあることから、男が長年求婚し続けていたことがわかり、またそのことが男の女に対する執着・愛情の強さを自ずと物語ることになるが、〈所謂後人注〉では盗み出す動機が「かたちのいとめでたくおはしければ」とだけしか語られないため、男が女を知つてどれくらい時間が経つのか、どれだけ女に思いをかけていたのかを読者はうかがい知ることができず、むしろ容貌の美しさにひかれた表面的な懸想であつたという印象を与えるものとなつている。

② 盗み出されることに對する女の了解

前半部においては、女の方も長年にわたる男の求婚という事情を知っているからか、あるいは既に男と恋愛關係を結んでいたためであるのか、男によつて連れ出されるにあたつても一定の同意をしているように読める(1)。一方、〈所謂後人注〉では、盗み出された女が「いみじう泣く」状態であつたことが語られる。盗み出されるにあたつての行為であるため、連れ出そうとする男に對する拒否・嫌悪・恐怖の表現としてしか解しようがなく、盗み出す行為はあくまで男の一方的な行為であつたことになる。

③ 男から女を奪つた存在

前半部では女が鬼に食われ、死んで(姿を消して)しまふ。一方、〈所謂後人注〉部分では、二条の後(すなわち藤原高子)の兄である国経・基経兄弟が女の泣く声を聞きつけ、盗み出される現場を押さえ、男から妹を取り返したという結末になる。

今、三つのポイントを設定して前半部と〈所謂後人注〉を比較した。懸想する女を男が盗み出すが失敗に終わるといふ根幹部分こそ共通しているが、枝葉は相違点を挙げればきりがなく、果たして同じ出来事の語り直しとして把握し得るかどうかも疑問なしとはしないほどである。かつてこの後人注説を積極的に支持した森本茂の議論(2)が反芻されるところである。

だが、〈所謂後人注〉部分は、やはり物語の正文として読まれるべきであると考える。〈所謂後人注〉がまさに後人による注記の本文化したものとする考え方は、近年では阿部方行(3)によつてその歴史的経緯も含めて詳細に論じられ、否定されているが、それによらずとも、いわゆる第三段から第六段の二条后章段群と第九段の東下り章段との間にある程度の連続性が存していることを考えるだけでも(このことについても、阿部も言及している)、そのことは

ほぼ明白である。身もふたもない言い方にはなるが、第六段で女が死んでしまつては、第九段で男が折に触れて追慕する女の存在がきわめて説明しにくくなるからである。したがつて、女は生存していなければならぬし、また男が女に文を書く際の「御もとに」という言葉によつて表現される女の高貴さは、それが第三段から第六段のヒロインである二条の後藤原高子であることによつて初めて納得されるものである。第九段だけをあくまでも独立した章段として把握しようとすれば、「御」で表現される女の高貴さはなくもがながなの情報と化してしまふ。愛する女を都に残してはるばると東国までやつてきたという粹組みさえあれば基本的には事足りるのである。殊更な高貴さを女に付与する必要はないはずである。そのように考えれば、第九段東下り章段は、それ以前の章段との接続性・連続性をもつて読むべきことをある程度要求されていると考える方がやはり自然であり、そうであるからには、東下り章段は、二条の後章段群の、しかも〈所謂後人注〉部分をこそ正伝として採用し成立しているのだとまずは考えざるを得ないのである。

二

前節を踏まえたうえで、次に、第六段前半部に、ある疑問を投げかけてみたい。それは、「女が鬼に食われてしまった結果、男の前から姿を消した」ということを、当の男自身が理解していただろうかという疑問である。女が鬼に食われるという怪異性のインパクトのせいで意外に見逃されがちだが、いつの間にか我々読者は、男が、女が鬼に食われたことを悲しんでいるかのような読解をしている面があるように思われる。だが、この問いに対する答えは、当然「否」でなければならぬ。なぜなら、男がこの場所に宿ることを気が進まないながらも決定したのは、夜という時間や悪天候が大きな原因だつたわけであるが、その中の一つには、「鬼ある所とも知らず」ということもあつた。も

ちろん、男にとつては夢想だにしていなかったであろうが、万が一にもこの場所が鬼の住むところであると知っていたならば、男は、悪条件にもかかわらずこの「芥河」近くの「あばらなる倉」に女を宿らせることは当然なかつたはずなのである。付け加えていえば、雷鳴のために、男は女の悲鳴すら聞くことができなかつた。だから、あくまでも男の意識に沿つた形でいえば、夜が明けて再び逃避行を続けようとしたところ、女がどこにも見当たらないという事実突き当たつただけなのであつて、女が鬼に食われてしまったことなど知る由もないはずなのである。男には女が消えた理由はわからないのである。したがつて、男が「足ずりをして泣くのも、女が突然消えてしまつたということ自体に対する悲しさがそうさせるのであつて、鬼に食われたことを悲しんでいるわけではない。つまり、鬼の存在を知っていたのは、物語の語り手だけだということになる。だから、読者は、少なくとも前半部分について、語り手の語る内容をそのまま信じて読み進めるしかない。

だが、これに対して〈所謂後人注〉部分はどうか。〈所謂後人注〉部分は、実在の「二条の後」こと藤原高子と国経・基経兄弟および「いとこの女御」藤原明子との関係において男の行動を語ろうとする。前半の出来事に対して、「事實はこうだつたのだ」と修正・訂正を図ろうとするのである。これによつて前半部の語りは相対化されることになる。ところで、『伊勢物語』の語り手については、山本登朗に「伊勢物語の作者はすでに述べたように一人のみとは考えられないが、伊勢物語が一つの物語である以上、彼等作者たちによつて仮構された虚構の語り手は、当然のことながらただ一人と考えられねばならない。作者は、仮構されたその語り手に物語を語らせると同時に、物語についてさまざまな補足や不審や批評を述べさせてもいる」⁽⁴⁾との指摘がある。現行『伊勢物語』を物語として統一体とみなす限り、その語りは一人の語り手に収斂されると考えるべきだということであろう。

だが、第六段に限定して語り（手）のありようを考える場合、また違つた考え方を必要とするようだ。私見では、少なくとも第六段においては、語り手が一人だとは必ずしも言えないように思われる。

その手がかりとなると思われるのは、〈所謂後人注〉部分における、

それをかく鬼とはいふなりけり。

という一文である。言わずもがなの部分もあるが、この一文の言わんとすることを明らかにしておきたい。「鬼」は男から女を奪い取った存在であるから、「それ」は、〈所謂後人注〉において「鬼」に対応する人物、すなわち「堀河の大臣、太郎国経の大納言」の二人を指していることは疑いようがない。つまりこの一文は、「国経・基経兄弟のことを前半部においては鬼と言ったのである」と言っていることになる。

それでは、「言ったのである」の部分、すなわち「いふなりけり」の主語は一体誰になるのであろうか。既に確認したように、男は鬼の存在を最後まで知らなかったわけであるから、「いふ」の主体は、基本的には男ではないはずだ。そして男でなければ、それは語り手だということにならざるを得ない。そして、この章段の語り手が一人であるという仮定に立つて読み直してみると、「それをかく鬼とはいふなりけり。」は、「私（＝語り手）」は、国経・基経兄弟のことを前半部においては鬼と言ったのである。」と解釈しなければならぬことになる。全く成立しないわけでは無いが、やはりこれは少しおかしい。なぜなら、この語り手は一体、何を言うために、こうした男の失敗談を、鬼に女が食われた悲劇として最初に提示しているのかという疑問が生じるからである。殊更に怪異的な悲劇をでっち上げておきながら、それを、たちまちのうちに現実のレベルで訂正してしまうことに、果たして何らかの効果を認め得るであらうか。

ここまでの議論を簡単に整理しておこう。前半部と後半の〈所謂後人注〉部分には、これまでも指摘がある通り、かなり位相を異にする部分もあるのは否めない。だが、それにも関わらず、〈所謂後人注〉は、やはり物語の正文と認める方に分がある。前半部においては、鬼の存在について知っているか否かという観点から読者は語り手に依存して読み進めるしかないのだが、〈所謂後人注〉では、その前半の語り自体が相対化されており、語り手が一人だと仮定する場合、物語の構成上やや不可解な側面を残す。

このように考えてくると、やはり第六段においては前半部と〈所謂後人注〉との間に語り手の交替があるということとを想定する方が適当なのではないだろうか。すなわち、前半の語り手は、男による女の盗み出しを長年の求婚がかなわなかったゆえの最終手段として描き、そこには女の同意もあつたこと、そしてその逃避行も、女が鬼によつて食われ、永遠に失われる結末を迎える悲劇として語つた。それを承けて、後半部〈所謂後人注〉部分の語り手は、盗み出しが、女の美貌に惹かれた男の一方的な行為であり、女の同意がなく実行されたものであり、女の泣き声によつて女の兄たちに妨害されたというのが事の真相であつたと語り直した、そう見る方が良いのではないか。怪異的な悲劇として語る前半の語り手を、〈所謂後人注〉の語り手が事実根差して種明かしをするという形で物語が語りおさまられると見るべきなのではないだろうか。

第一節において、〈所謂後人注〉部分こそ、いわば正伝として前後の章段との接続性・連続性が企図されているものである可能性が高いことを述べた。それに対して、前半部は、基本的に単発的なエピソードとして語ろうとする性格が強いといえるだろう。たとえば、第六段に関して、「年を経てよばひわたり」とある部分が、第三段から第五段と続いてきた一連の出来事との連続性を一応感じさせはするものの、実際に求婚し続けてきたという行動はそれ以

前の章段には明確には描かれていないわけであるから、厳密にはむしろ第三段から第五段と一線を画すことを意図したとも見ることもできる情報である。そしてそれ以上に、盗み出した女は鬼に食われて死んでしまうわけであるから、前半部の語りによる限り、男の恋はこの時点で完結したといわざるを得ない。つまり、第六段は、二条の后が男に盗み出される事件を、女が鬼に食われるという怪異と、ならびに長年求婚し続けた女への恋がその女の死によつて全き終焉を迎えるという悲劇として、〈事実〉を曲げて語りなした前半の語り手に対して、〈所謂後人注〉の語り手がその語りなしを修正し、〈事実〉を提示するという枠組みを持つといえる。そのうえ、〈所謂後人注〉の語り手は、第六段前後の章段と連接・連絡する働きをも同時に担っている。つまり、第六段は、〈事実〉を知り他の章段との連接も図り得る、いわば〈大きな語り手〉が、その〈事実〉を改変・潤色して一編の物語に仕立て上げて語ろうとする〈小さな語り手〉の語りを修正するという構造を持つていることになる。

では、その〈小さな語り手〉は何を意図してそのような〈事実〉を曲げた語りを行うのか。その手がかりこそ、かつて〈所謂後人注〉部分が、後人による補注の流入とみなされてきた根拠であるところの、素材や構造のずれにあると思われる。以下、その「ずれ」に相当するものを挙げてみよう。

- a 男が女に長年にわたり求婚をし続けていたこと。
- b 男が女を盗み出すにあたっては、女の同意があつたとみられ、つまり女の方でも男に対する愛情を持つていたこと。
- c 男が女を押し入れた倉の前で武器を携え、女を追手から守り抜こうとしたこと。
- d 男が女が雷などの悪条件のため、女が鬼に食われるのに気づくこともできなかったこと。
- e 女を失つたのち、男は死にたいほどの悲しみを味わつたこと。

これらのことは、〈所謂後人注〉では、次のように修正される。

a 男は女の容姿に惹かれ、盗み出すことにした。どれだけの期間懸想していたかの記述は特にない。

b 女の同意・愛情はない。拒否抵抗の泣き声が事件発覚のきっかけとなる。

c・d・e 特に対応する記述はない。

比較してみよう。女に対して真率で、守るためには戦いも辞さない、前半の勇敢な男像に対し、〈所謂後人注〉の男像には軽薄さや身勝手さが読み取れ、またcに表現される勇敢さも感じたい。このように見えてくると、前半部分は、後半の〈所謂後人注〉に対して男を美化し、悲劇のヒーロー化させて語ろうとする方向性が強いことが理解されよう。なぜ、語り手はこのように男を美化する必要やまた欲求があったのか。それは、まさに男が前半の〈小さな語り手〉であつたからだとか考えようがないのではないか。この点に関して、私は、既に第二節において、前半部の語り手が「基本的には男ではない」ことを述べている。だが、それは、物語の中で「鬼」が実在しているにもかかわらず、男が倉を「鬼ある所とも知らず」という状態だったという語りを認めたくえでのことであつた。実際は「鬼」は国経・基経兄弟のことを指していたわけであるから、そもそも鬼の存在自体が虚構であり、そうであれば「鬼ある所とも知らず」という説明情報もまた虚構であつたとしなくてはならない。物語の骨格となる情報の信頼性が疑われるわけであるが、こうした改変・潤色を行う意味や必要のある人物は誰であろう。それは、男以外ではありえない。前半の情報提供者とその語り手はともに他ならぬ男自身であり、盗み出した女をその兄たちに奪回されたという失敗談を、女が鬼に食われてしまったという怪異的な悲劇として自己弁護もかねて語つたとみられるのではないか。それに対して、〈所謂後人注〉は、それらを実在の人物と、実際の出来事というレベル（ただし、これとてもあくまで物語における設定上のものであり、歴史的事実を意味するものではない）で語つて、男による前半部の語りを無化しているのだと思われるのである。

四

前節において、第六段前半部と〈所謂後人注〉とで語り手は別人だと目されること、前半部は男を美化する方向性が強く、結果として男自身が語り手だと想定されることを述べた。本節では以上の点を踏まえて第六段の構造について思うところを述べたい。

第六段はこれまで、盗み出した女が鬼に食われて消えるという怪異性を帯びた悲劇という点に重きが置かれて読まれてきた傾向が強い。後半部が〈所謂後人注〉として「つけたり」的な位置を与えられてきたのはそのためである。したがって、その観点から〈所謂後人注〉が物語の正文であるか、後人の補注が混入したのかという議論が展開されてきたわけである。結果、第六段の評価や位置づけも前半部の読解から引き出されてきた要素によってなされている部分が大きい。だが、現在の研究の傾向として〈所謂後人注〉が物語の正文として考えられる方向にあるのならば、読解や評価もまた〈所謂後人注〉部分をも視野においてなされるべきなのではなからうか。

では、〈所謂後人注〉部分を物語正文として視野に入れたうえで、第六段に浮かび上がってくるものとは何か。それは、とりもなおさず、前半部と〈所謂後人注〉部分との落差ということに他ならない。前半部の怪異性ある悲劇が〈所謂後人注〉では、現実在即して説明され、悲劇のヒーローであつた男が、〈所謂後人注〉によつて一転して失敗した狼藉者と化する。この落差と、そこで訂正される〈小さな語り手〉(すなわち男)の面目の失墜こそが第六段の核心なのではないか。

仮に第六段をこのように読むとして、次には、これまでの考察でも言及した〈大きな語り手〉すなわち前後の章段との連続・連接を視野に入れた語りについて本来ならば言及しなければならないだろう。だが、複数の章段、あるいは『伊勢物語』全体を視野において考察しなければならない事柄であり、残念ながら今はそこまでの準備はない。だ

が、『伊勢物語』のいくつかの章段について、こうした第六段のあり方と通底する要素を持つのではないかと推測されるものは確かにある。ここでは、その一例として初段を挙げたい。

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきこともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

やはり章段後半の「ついでおもしろき……」以降に注目したい。「女はらから」に歌を送った男の行動に語り手が「男は」事の次第がおもしろいと思つたのだろうか」と疑問を提示し、源融の「みちのくの……」の歌を引き合いに男の行動を「同様なものだ」と批評する。第六段のように語り手が二人いるとみることができるとは微妙であるが、男の、狩衣の袖をちぎって歌に添えるという一見情熱的な行動が、語り手によって融歌の趣向に回収されてしまう結末となっており、これもまた、第六段のように、語り手によって男の行動や歌が相対化されているケースだとも考えられよう。

おわりに

初段についても、詳細な検討を行うにあたっては別の機会を求めたいと考えているが、このようにしてみると、ここまで考察してきた第六段のような、例えば男の行動を相対化する語りの構造、すなわち『伊勢物語』の語りの構造という問題は、それがあくまで章段個々の問題にとどまるのか、あるいは章段群レベルでも機能するのか、さらに大きく作品全体に関わるのかと、まだ見込みとしても明確なことはいえないが、改めて考察するに値するテーマだと考えている。様々な課題が設定可能だと思うが、たとえば、章段群ということでは今回の第六段を含む、いわゆる二条の後章段群をこうした語りという観点から分析するとどうなるかということがあるし、いわゆる二条の後章段群を焼き直した感のある第六十五段との関係を語り(手)という観点から考えてみることはできないか、という発想もわく。最後に例として挙げた初段にしても、単体としてはもちろん、対の関係が意識されているとおぼしい第二段との関係をこの語り(手)という観点から考えるとどういうことができるかという問題も思い浮かぶ。考えるべきことは多いのではないか。今後も機会を得て、考察を重ねていきたいと思う。

- (1) 例えば、森本茂『伊勢物語論増補版』(大学堂書店 一九八一年)に『かれは何ぞ』と男に尋ねる、そういう心理状態からみると、女の心は乱れていることはなく、男に合意して連れ出されたようである」との指摘があり、また、川添房江『源氏物語表現史 喩と表現の位相』(翰林書房 一九九八年)も、「かれは何ぞ」という女の問いについて、「盗まれた女が男に心を許して肉声を発」したものととの理解を示している。
- (2) 注(1)書において、森本は、「本文」(前半部)と「文末」(所謂後人注)との素材上・内容上の不調和から、後半部の後人作説を導いている。

- (3) 阿部方行「勢語・二条の後物語の注記ははたして後人注か―伊勢物語論序説―」(王朝物語研究会編『研究講座 伊勢物

(4) 語の視界』所収 新典社 一九九五年)
山本登朗『伊勢物語論 文体・主題・享受』(笠間書院 二〇〇一年)